

令和6年6月13日(木)「教えて!!ドクターQ&A」

神奈川新聞⑤ 肺がんの早期発見

(質問) 毎年、胸部レントゲン写真による肺がん検診を受けており、今のところ異常はありませんが、長年たばこを吸っていたので肺がんが心配です。早期発見のために、ほかにどんな検査を受けるのが良いですか。

(回答) 肺がんは、死亡率の高いがんの一種です。これはまた、喫煙と関係の深いがんとしても知られています。喫煙以外に肺がんの原因と考えられているものに、アスベスト(石綿)を始めとする有害物質への職業的な曝露、遺伝的な要因、大気汚染などがあります。このうちアスベストは以前、建築資材などとして広く用いられていました。肺がんを発症し、進行してくると、咳、痰、呼吸困難、胸の痛みなどが起こってきます。このような症状は、ほかの呼吸器の病気とも見分けがつきにくいものですが、長引いたり次第に悪化したりする場合には、かぜなどと決めつけず、受診して検査することが大切です。肺がんが進行して症状が出ている場合、がんが周囲に広がったり、あるいは転移を起こしたりしている割合が高くなってきます。肺がんが骨や脳に転移し、骨の痛みや神経症状のため医療機関を受診し、検査の結果肺がんが見つかることも希ではありません。

こうして肺がんのステージが進むほど、治療は困難になり、生存率も低くなってきますので、できるだけ症状が出る前の早期に発見し、治療することの重要性が強調されています。肺がんの検診として、現在わが国で最も一般的なものは、自治体で行われる胸部レントゲン検査でしょう。40歳以上の成人を対象として、年一回行われているものです。メリットとしては、安価で放射線への被曝が比較的少ないことがあげられますが、一方で非常に小さな肺がんや、ほかの臓器の陰になっている肺がんを見つけることは難しい場合もあります。ご質問者様は喫煙者であるということですが、長年多量のたばこを吸っている男性など、肺がんリスクの高い方の場合、「喀痰細胞診」というものも勧められます。これは、痰を集めて顕微鏡で観察し、その中にがん細胞が無いか調べるものです。

肺がんの高リスク群を対象とした検査としては、ほかに「低線量胸部CT検査」というものがあります。これは、一般的な胸部レントゲン検査で見つけにくい小さな肺がんや、ほかの臓器の陰になっている肺がんを見つけることを目的としたもので、胸部レントゲンに比べ数倍の精度があるといわれています。放射線の量は普通の病気の検査に使うCTよりは低く抑えてあります。ちなみに、どのような検査であっても、画像による異常だけでは肺がんの診断を確定することはできません。そのあとに追加して各種の検査を行い、肺がんとそれ以外の異常との区別をしなければならないのです。胸部CTに続いて行われる検査としては、気管支鏡検査、CTガイド下生検、胸腔鏡検査などがあり、いずれも肺の一部を切り取り、顕微鏡による観察で含まれる細胞の種類を調べ、最終的な診断につなげることを目的としています。